愛知教育大学教育臨床総合センター紀要
第６号，pp. 37～ 45（2015年度）

中学生の有能感タイプによる居心地の良さの感覚の違い：学校生活スキルとの関連から

坂　井　李　奈（横浜市立いぶき野小学校）
髙　田　奈　美（岩倉市立曽野中学校）
五十嵐　哲　也（愛知教育大学養護教育講座）

The difference of delightful feeling depending on self-efficacy types of junior high school students：In relation to school life skills

Rina SAKAI（Ibukino Elementary Junior High School）
Nami TAKADA（Sono Elementary Junior High School）
Tetsuya IGARASHI（Department of School Health Sciences, Aichi University of Education）

要約　中学生における仮想的有能感を含めた自信の状況と，居場所感との関係について学校生活スキルに注目して検討した。その結果，仮想型は健康維持スキルが低い者が最も居心地の良さの感覚を悪くとらえており，萎縮型は自己学習スキルと集団活動スキルを高めることによって，居心地の良さの感覚を向上させる可能性が示唆された。そして，全能型と自尊型は同輩とのコミュニケーションスキルを高めることによって，いっそう居心地の良さの感覚を向上させる可能性が示唆された。また，最も学校での居心地の良さの感覚を向上させる有効な方法は「自尊感情」を高めることであり，さらにコミュニケーションスキルのトレーニングを行うことでより居心地の良さの感覚を高めることが考えられた。

Keywords：有能感　学校生活スキル　居心地の良さの感覚

１．問題と目的

中学生は，身体的にも心理的にも変化の大きな時期にあり，学校生活や日常生活における様々な不安や葛藤に立ち向かい，それを乗り越えていくことで成長する（五十嵐, 2010）。しかし，今日，上手く壁を乗り越えていくことができず，不登校等の学校不適応状態にある中学生が年々増加している。

こうした現状に対し，児童生徒の「心の居場所」づくりを推進することで問題の解決を図ろうとする取組みがある。例えば，文部科学省（1992）は，学校は児童生徒にとって精神的に安心することのできる「心の居場所」としての役割を果たすべきであるとし，全教職員が協力して不登校に取り組むこと，カウンセラーなどの専門家による教職員への指導援助システムを確立すること，「適応指導教室」を充実させることなどが取り組まれている。この点に関する実証的検討として，石本（2010）は，「ありのままでいられること」や「役に立っていると思えること」を居場所感として捉え，中学生においては，自己肯定意識や学校生活享受感に対して居場所感が促進的な影響を与えていることを明らかにしている。また，大久保（2005）は，中学生や大学生の居場所感と学校享受感，学校適応感が，相互に高め合う関係にあることを示している。

ところで，居場所感を高める要因の一つとして，「自信（有能感）」が挙げられる。有能感とは，「環境と効果的に相互交渉する能力」と定義される（White, 1963）。そして，学校に自分の居場所が感じられない不登校や引きこもり傾向の者の多くは，背景に自己に対する自信の無さや無力感を抱えていることが多いとされる（忠井・本間, 2006）。また，松井・笠井（2012）は，不登校経験のある者は，何か課題に打ち込もうとしても「自信がない」ゆえに諦めてしまうという特徴があると述べている。このように，有能感と居場所感の間には関連性があると推測され，居場所感を高めるためには有能感を高めていくことが必要だと考えられる。

しかし，有能感とは単純なものではなく，他者軽視をすることによって保たれる有能感もある。速水・木野・高木・蘭・佐藤・小泉・桜井（2003）は，他者を軽視することによって得られる自分の有能さの感覚を「仮想的有能感」として提唱した。仮想的有能感は，実際のポジティブ経験とは関係なく，他者を軽視することによって自分を優位であると感じる偽りの有能感である（速水・小平, 2006）。そして，速水・小平（2006）は，仮想的有能感（他者への価値評価の指標）とともに，自尊感情（自己への価値評価の指標）を合わせて検討することにより，より本質的に仮想的有能感が高い人を抽出する試みを行っている。すなわち，同じく仮想的有能感が高い者であっても，自分に自信があるために他者を低く評価する場合や，自分に

対する自信の無さを隠そうとして他者を低く評価する場合などがあると想定されるため，これらを識別する必要があるとしている（速水・小平, 2006）。それにより，全能型（仮想的有能感と自尊感情がともに高いタイプ），自尊型（仮想的有能感が低く自尊感情が高いタイプ），仮想型（仮想的有能感が高く自尊感情が低いタイプ），萎縮型（仮想的有能感と自尊感情がともに低いタイプ）という類型が提唱され（速水・小平, 2006），様々な検討がなされている。例えば，鈴木（2010）は，仮想型に分類される者は，「情動性」（心配性，緊張，抑鬱，自己批判，気分変動を意味する）が高く，「愛着性」（他者への温厚な振る舞い，協調的・共感的態度，信頼・尊重を意味する）や「統制性」（責任感や几帳面さ，努力や計画的行動を意味する）が低いことを示している。また，小平・小塩・速水（2007）は，「仮想型」に分類される者は，対人関係において抑鬱感情や敵意感情を強く感じ，かつ感情の揺れ動きが激しいことを述べている。

このように，中学生の学校における居場所感を高めるには，自信の有無が影響を与えていると推測される。しかし，自信は，仮想的有能感のように多様な様相を有するものであるが，こうした複雑な状況を含めて居場所感との関連を検討した研究はない。さらに，仮想的有能感の研究自体が大学生を対象としたものが多く，中学生の状況についてはHayamizu, Kino & Takagi（2007）が述べているにとどまっている。そこで，こうした点を明らかにすることが急務であると言えよう。

また，他にも，居場所感に寄与する要因として，これまで多くの検討がなされてきている。それらの研究で指摘されてきた諸要因が，仮想的有能感を含めた自信の状況と居場所感との関連性に対し，何らかの影響をもたらすことは考えられないだろうか。例えば，五十嵐（2011）は，学校に居場所感をもちにくくなっていると考えられる「不登校傾向」の問題に対し，学校生活スキルの獲得状況の影響があると指摘している。そして，学校段階の変化に伴う不登校傾向の低減に対し，学校生活スキルのうち，特に自己学習スキルや健康維持スキルの獲得が関与していることなどを述べている。学校生活スキルとは，「児童生徒が１人の個人として成長していく中で出会う発達課題と学校生活を送る上で出会うことが予測される教育諸問題に対処する際に役立つスキル」（飯田・石隈, 2002）のことである。したがって，こうした学校生活スキルの獲得によって，たとえ自信が低いという状況であっても居場所感が高まる可能性があるのか，他者軽視傾向にもとづく自信を有しているという状況であっても居場所感が高まる可能性があるのか，など，中学生に支援すべき視点が明らかになると考えられる。

そこで本研究では，中学生における仮想的有能感を含めた自信の状況と，居場所感との関係を検討する。加えて，これらの関係性に対し，学校生活スキルがどのように関与するのかという点も検討する。以上を通じ，中学生に対して，自信の状況によって，どのような側面への働きかけが居場所感の向上に有用であるのかを明らかにすることが，本研究の目的である。

２．方法

２－１．調査対象

公立Ａ中学校398名，公立Ｂ中学校570名を対象とした。回答者数は968名であったが，分析では無回答の項目があるものはすべて除外した結果，有効回答数は814名（男 417名，女 397名），有効回答率84.09％であった。

２－２．調査内容

（１）学校生活スキル

飯田・石隈（2002）が中学生を対象に開発した，学校生活スキル尺度（中学生版）を使用した。本尺度は「自己学習スキル」「進路決定スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」「同輩とのコミュニケーションスキル」の合計54項目からなる。飯田・石隈（2002）によって，信頼性・妥当性が確認されている。なお，五十嵐（2011）は，尺度を使用する際に調査対象者の負担を考慮し，下位尺度ごとに因子負荷量の高い３項目を抽出して短縮版を作成している。短縮版に関しても，確証的因子分析によって原尺度と同じ構造であることが確認されている。そこで本研究においては，五十嵐（2011）の短縮版を使用した。回答形式は「全くあてはまらない」～「とてもあてはまる」の４件法であった。

（２）居心地の良さの感覚

大久保（2005）が中学生を対象に開発した，学校適応感尺度の下位尺度である「居心地の良さの感覚」を使用した。これは11項目からなる。大久保（2005）によって，十分な信頼性・妥当性が確認されている。回答形式は「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の５件法であった。

（３）仮想的有能感

速水・木野・高木（2004）は，仮想的有能感尺度を開発し，妥当性を検討した。それは，速水・木野・高木（2005）によって信頼性が検討されている。その後，本尺度は，中学生にも使用できるように変更され（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004），安藤（2006）によって日本語訳されている。本研究では，この安藤（2006）によって日本語訳された11項目を使用した。回答形式は「あてはまらない」～「あてはまる」の５件法であった。

（４）自尊心尺度

鈴木（2005）が中学生を対象に開発した，自尊心尺度を使用した。本尺度は，鈴木・小川（2007）によっ

て，６項目による構成が最も信頼性が高いことが確認されている。そこで，本研究は，鈴木・小川（2007）の６項目の尺度を使用した。回答形式は「全く思わない」～「よく思う」の５件法であった。

２－３．調査時期と手続

2014年10月に，無記名の質問紙法により，集団で一斉に実施した。

３．結果

３－１．各尺度の信頼性と基本統計量

「学校生活スキル」は，五十嵐（2011）に基づいて下位尺度に分類した。「居心地の良さの感覚」「仮想的有能感」「自尊感情」はそれぞれ１因子であるため，それぞれ項目の合計を標準得点化した。

各尺度の信頼性を検討するために，クロンバックの α 係数を算出した。その結果，「学校生活スキル」は，自己学習スキル $\alpha=.68$，進路決定スキル $\alpha=.57$，集団活動スキル $\alpha=.58$，健康維持スキル $\alpha=.60$，同輩とのコミュニケーションスキル $\alpha=.59$であった。本研究では全体的に α 係数は若干低めであるが，原尺度（飯田・石隈, 2002）は十分な信頼性があることが証明されている。また，「学校生活スキル」尺度短縮版を開発した五十嵐（2011）は，確認的因子分析によって原尺度と同じ構造であることを確認している。よって，本研究でも十分使用できると判断した。その他については，「居心地の良さの感覚」 $\alpha=.92$，「仮想的有能感」 $\alpha=.88$，「自尊感情」 $\alpha=.88$となり，内的整合性は十分であった。

また，各尺度についての性差を検討するため，t 検定を行った。その結果，まず「学校生活スキル」については，自己学習スキル（$t[11.89]=3.94$，$p<.001$），集団生活スキル（$t[809.17]=5.38$，$p<.001$）であり女子の方が有意に高く，一方，「仮想的有能感」は，男子の方が有意に高い結果であった（$t[812]=4.86$，$p<.001$）。それ以外については，有意な差はみられなかった。このように，本研究で最終的な従属変数として検討する「居心地の良さの感覚」については性差が認められなかったため，以後の分析においては全対象者について行うこととした。

３－２．「居心地の良さの感覚」と他の尺度との相関

各変数間の関連性を調べるために，「居心地の良さの感覚」と他尺度との間におけるピアソンの積率相関係数を算出した。その結果（Table１），「居心地の良さの感覚」は，「学校生活スキル」の全下位尺度（$r=.26$～$.40$，$p<.001$）および「自尊感情」との間には有意な正の相関が認められた（$r=.59$，$p<.001$）。一方，「仮想的有能感」との間には有意な負の相関が認められた（$r=-.25$，$p<.001$）。

３－３．有能感の４つのタイプ分け

「仮想的有能感」に関して，先述の４タイプに分類することとした。そこで，速水・小平（2006）に倣い，「仮想的有能感」と「自尊感情」の平均値で対象者をそれぞれ高群・低群に分類し，その２つの分類を組み合わせることで，有能感の４タイプに被調査者を分類した。その４タイプとは，仮想的有能感と自尊感情が共に高い「全能型」，仮想的有能感が低く自尊感情が高い「自尊型」，仮想的有能感が高く自尊感情が低い「仮想型」，そして仮想的有能感と自尊感情が共に低い「萎縮型」である。その結果，全能型（214名，26.29％），自尊型（233名，28.62％），仮想型（209名，25.68％），萎縮型（158名，19.41％）と分類された。

３－４．有能感タイプによる学校生活スキルの違い

以上の有能感タイプによって学校生活スキルに違いがあるかを検討するため，有能感タイプを要因とする一要因分散分析を行った。

その結果，自己学習スキルについては有意差が認められ（$F[3/810]=13.67$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較を行ったところ，全能型・自尊型＞仮想型・萎縮型であった。また，進路決定スキルについても有意差が認められ（$F[3/810]=7.42$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較を行ったところ，全能型・自尊型＞仮想型・萎縮型であった。さらに，集団活動スキルについても有意差が認められ（$F[3/810]=6.94$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較を行ったところ，全能型＞仮想型，自尊型＞仮想型・萎縮型であった。加えて，健康維持スキルについても有意差が認められ（$F[3/810]=29.70$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較を行ったところ，全能型・自尊型＞仮想型・萎縮型であった。また，同輩とのコミュニケーションスキルについても有意差が認められ（$F[3/810]=16.47$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較を行ったところ，全能型・自尊型＞仮想型・萎縮型であった。

Table１　「居心地の良さの感覚」と他尺度との相関

	進路決定スキル	集団活動スキル	健康維持スキル	同輩とのコミュニケーションスキル	仮想的有能感	自尊感情
居心地の良さの感覚	.26 ***	.28 ***	.27 ***	.40 ***	-.25 ***	.59 ***

*** $p<.001$

３－５．有能感タイプによる居心地の良さの感覚の違い

有能感タイプによって「居心地の良さの感覚」に違いがあるかを検討するため，有能感タイプを要因とする一要因分散分析を行った。その結果，有意差が認められ（F［3/810］＝88.87，p＜.001），Tukey 法による多重比較を行ったところ，自尊型＞全能型＞仮想型・萎縮型であった。

３－６．有能感タイプと各スキルの高低との組み合わせによる居心地の良さの感覚の違い

各学校生活スキルについて，それぞれの平均値によって対象者を高低群分けした（各スキルの高群をＨ，低群をＬと表記する）。その上で，これらの高低群と，有能感タイプを組み合わせ，対象者を８群分けした。以上の群分けによって，「居心地の良さの感覚」に違いがあるかを検討するため，群分けを要因とする一要因分散分析を行った。

（１）自己学習スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討（Table２）

F［7/806］＝42.33，p＜.001であり，Tukey 法による多重比較を行ったところ，自尊型Ｈ・自尊型Ｌ＞全能型Ｈ・全能型Ｌ・萎縮型Ｈ＞仮想型Ｈ・仮想型Ｌ・萎縮型Ｌであった。

（２）進路決定スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討（Table３）

F［7/806］＝45.21，p＜.001であり，Tukey 法による多重比較を行ったところ，全能型Ｈ・全能型Ｌ・自尊型Ｈ・自尊型Ｌ＞仮想型Ｈ・仮想型Ｌ・萎縮型Ｈ・萎縮型Ｌであった。

Table２　自己学習スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討

		Mean	(*SD*)	*F*値	多重比較
自己学習スキルＨ群	全能型	.27	(.77)		
	自尊型	.72	(.78)		
	仮想型	-.50	(.89)		
	萎縮型	-.17	(.94)	42.34 ***	C・D＞A・B・G＞E・F・H
自己学習スキルＬ群	全能型	.08	(.89)		
	自尊型	.42	(.70)		
	仮想型	-.70	(.94)		
	萎縮型	-.64	(.99)		

*** p＜.001

Ａ：自己学習スキルＨ群・全能型，Ｂ：自己学習スキルＬ群・全能型
Ｃ：自己学習スキルＨ群・自尊型，Ｄ：自己学習スキルＬ群・自尊型
Ｅ：自己学習スキルＨ群・仮想型，Ｆ：自己学習スキルＬ群・仮想型
Ｇ：自己学習スキルＨ群・萎縮型，Ｈ：自己学習スキルＬ群・萎縮型

Table３　進路決定スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討

		Mean	(*SD*)	*F*値	多重比較
進路決定スキルＨ群	全能型	.26	(.79)		
	自尊型	.71	(.78)		
	仮想型	-.44	(.86)		
	萎縮型	-.06	(.97)	45.22 ***	A・B・C・D＞E・F・G・H
進路決定スキルＬ群	全能型	.11	(.86)		
	自尊型	.48	(.73)		
	仮想型	-.78	(.96)		
	萎縮型	-.73	(.91)		

*** p＜.001

Ａ：進路決定スキルＨ群・全能型，Ｂ：進路決定スキルＬ群・全能型
Ｃ：進路決定スキルＨ群・自尊型，Ｄ：進路決定スキルＬ群・自尊型
Ｅ：進路決定スキルＨ群・仮想型，Ｆ：進路決定スキルＬ群・仮想型
Ｇ：進路決定スキルＨ群・萎縮型，Ｈ：進路決定スキルＬ群・萎縮型

Table４　集団活動スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討

		Mean	(*SD*)	*F*値	多重比較
集団活動スキルＨ群	全能型	.33	(.80)		
	自尊型	.71	(.78)		
	仮想型	-.53	(.90)		
	萎縮型	-.13	(.95)	45.45 ***	A・B・C・D・G＞E・F・H
集団活動スキルＬ群	全能型	-.01	(.81)		
	自尊型	.40	(.69)		
	仮想型	-.69	(.95)		
	萎縮型	-.82	(.92)		

*** $p<.001$

Ａ：集団活動スキルＨ群・全能型，Ｂ：集団活動スキルＬ群・全能型
Ｃ：集団活動スキルＨ群・自尊型，Ｄ：集団活動スキルＬ群・自尊型
Ｅ：集団活動スキルＨ群・仮想型，Ｆ：集団活動スキルＬ群・仮想型
Ｇ：集団活動スキルＨ群・萎縮型，Ｈ：集団活動スキルＬ群・萎縮型

Table５　健康維持スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討

		Mean	(*SD*)	*F*値	多重比較
健康維持スキルＨ群	全能型	.27	(.83)		
	自尊型	.69	(.73)		
	仮想型	-.35	(.89)		
	萎縮型	-.05	(.93)	46.72 ***	A・B・C・D・E・G・H＞F
健康維持スキルＬ群	全能型	.06	(.78)		
	自尊型	.43	(.85)		
	仮想型	-.83	(.90)		
	萎縮型	-.69	(.95)		

*** $p<.001$

Ａ：健康維持スキルＨ群・全能型，Ｂ：健康維持スキルＬ群・全能型
Ｃ：健康維持スキルＨ群・自尊型，Ｄ：健康維持スキルＬ群・自尊型
Ｅ：健康維持スキルＨ群・仮想型，Ｆ：健康維持スキルＬ群・仮想型
Ｇ：健康維持スキルＨ群・萎縮型，Ｈ：健康維持スキルＬ群・萎縮型

（3）集団活動スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討（Table４）

$F[7/806]=45.44$，$p<.001$であり，Tukey法による多重比較を行ったところ，全能型Ｈ・全能型Ｌ・自尊型Ｈ・自尊型Ｌ・萎縮型Ｈ＞仮想型Ｈ・仮想型Ｌ・萎縮型Ｌであった。

（4）健康維持スキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討（Table５）

$F[7/806]=46.71$，$p<.001$であり，Tukey法による多重比較を行ったところ，全能型Ｈ・全能型Ｌ・自尊型Ｈ・自尊型Ｌ・仮想型Ｈ・萎縮型Ｈ・萎縮型Ｌ＞仮想型Ｌであった。

（5）同輩とのコミュニケーションスキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討（Table６）

$F[7/806]=45.54$，$p<.001$であり，Tukey法による多重比較を行ったところ，自尊型Ｈ＞全能型Ｈ・自尊型Ｌ＞全能型Ｌ・仮想型Ｈ・仮想型Ｌ・萎縮型Ｈ・萎縮型Ｌであった。

４．考察

４－１．「居心地の良さの感覚」と他尺度との関連

「居心地の良さの感覚」は，「学校生活スキル」の全下位尺度との間に正の相関がみられた。飯田・石隈・山口（2004）は，学校生活スキルと学校適応との間に正の相関があることを示しており，本研究の結果もこれに一致したと言える。

特に，本研究では，学校適応のうち「居心地の良さの感覚」に焦点を当てたが，この特定領域に対し全ス

Table６　同輩とのコミュニケーションスキルの高低と有能感タイプとの組み合わせによる検討

		Mean	(*SD*)	*F*値	多重比較
同輩との	全能型	.42	(.71)		
コミュニケーション	自尊型	.79	(.70)		
スキルＨ群	仮想型	-.45	(.98)		
	萎縮型	-.08	(.98)	45.54 ***	C＞A・D＞B・E・F・G・H
同輩との	全能型	.03	(.86)		
コミュニケーション	自尊型	.41	(.81)		
スキルＬ群	仮想型	-.69	(.89)		
	萎縮型	-.60	(.95)		

*** $p<.001$

Ａ：同輩とのコミュニケーションスキルＨ群・全能型，Ｂ：同輩とのコミュニケーションスキルＬ群・全能型
Ｃ：同輩とのコミュニケーションスキルＨ群・自尊型，Ｄ：同輩とのコミュニケーションスキルＬ群・自尊型
Ｅ：同輩とのコミュニケーションスキルＨ群・仮想型，Ｆ：同輩とのコミュニケーションスキルＬ群・仮想型
Ｇ：同輩とのコミュニケーションスキルＨ群・萎縮型，Ｈ：同輩とのコミュニケーションスキルＬ群・萎縮型

キルが関わっていたということが示された。まず，自己学習スキルとの関連について，石田・友廣（2014）は，中学生の学業への自信が，親和的な友人関係に正の影響を与えることを示している。そもそも，中学生は学業成績の悪さについて劣等感を感じやすい（髙坂, 2008）など，学習の状況が精神的健康を左右しやすい。そして，学習理解が良好であれば，欠席願望を抑制する（本間, 2000）とも指摘されている。したがって，学習面のスキルの高さは自らの精神的健康を高め，対人関係も良好にさせる効果があるため，学校での居心地の良さを感じやすくなるのだと考えられる。

また，進路決定スキルとの関連について，大久保・加藤（2005）は，自律性への欲求が高い者ほど，居心地の良さの感覚が高いことを示している。進路決定スキルは，進路決定に伴う様々な意思決定や，問題解決に関するスキルであり（飯田・石隈, 2002），自らの将来像に向かって行動できるような意思の明確さが求められるだろう。よって，そうした自律性の課題が反映され，本研究の結果がもたらされたと推測できる。

さらに，健康維持スキルと居心地の良さの感覚との間にも，関連が認められた。この点に関し，飯田・石隈（2002）は，健康維持スキルとは「体調不良を他人に相談したり，自身の体調管理をしたりすることができるスキル」であると指摘している。したがって，健康維持スキルが高ければ，心身の不調を抱え込まずに解決を促進できるようになり，ストレス反応は軽減されやすくなると考えられる。そして，杉本（2010）は，友達のいる居場所があるかどうかによって，無気力やイライラといったストレス反応が左右されることを実証している。本研究も杉本（2010）に一致しており，ストレス反応がうまくコントロールできるようなスキルを獲得していれば，ストレス反応が低減し，結果的に学校での居心地の良さが増すと示唆される。

加えて，集団活動スキルや，同輩とのコミュニケーションスキルについても，居心地の良さの感覚との間に関連が認められていた。集団活動スキルとは「学校における集団活動の際に必要とされるスキル」であり，同輩とのコミュニケーションスキルとは「同年代の友人や異性とコミュニケーションするときに必要とされるスキル」であって（飯田・石隈, 2002），いずれも対人関係を円滑に保つために有用なスキルであると考えられる。これらのスキルが居心地の良さの感覚と関連を示した点については，友人適応が中学生の欠席願望を抑制する要因であるという指摘（本間, 2000）に一致すると考えられ，対人関係が学校での居心地を左右することは自明であると示唆される。

また，「居心地の良さの感覚」は，「自尊感情」との間にも正の相関がみられた。杉本・庄司（2006）は，小～高校生が考える「居場所」の心理的機能には，「自己肯定感」が含まれることを示している。したがって，そもそも居心地の良さの感覚とは，自己を受容できる意味合いが含まれていると考えられ，本研究の結果は妥当なものであると考えられる。

一方で，「居心地の良さの感覚」は，「仮想的有能感」との間に負の相関がみられた。速水・木野・高木（2004）は，大学生において，「仮想的有能感」と学校生活や友人関係等に関する生活満足度との間に負の相関があることを示している。このことから，中学生でも速水・木野・高木（2004）と同様の関連性があると指摘でき，仮想的有能感をもつ者は，一般に生活満足度が低い可能性があると考えられる。

４－２．有能感タイプによる学校生活スキルの差異

次に，有能感の各タイプによって，学校生活スキルに差があるかを検討したところ，多くの学校生活スキ

ルの差は，主に自尊感情の高低によって左右されている状況が明らかとなった。しかし，集団活動スキルでは，他のスキルと異なり，「全能型」と「萎縮型」の間に差がみられなかった一方で，「自尊型」と「萎縮型」の間には他のスキルと同様に差がみられた。したがって，同様に自尊感情が高くても，仮想的有能感が低い方がより集団活動スキルを獲得しやすい可能性がある。集団活動スキルでは，集団における自分の行動を制御する力や，相手のことを思いやって行動することのできる力が求められており（飯田・石隈, 2002），他人を尊重して行動する力が必要である。仮想的有能感の高い傾向の人は，他者に対して攻撃的であったり（小平・小塩・速水, 2007），他者への共感性が低かったりするという特徴があり（速水・木野・高木, 2004），集団活動を円滑に行いにくいであろう。実際，伊田（2008）は，大学生の他者軽視傾向が，あらゆる生活価値観のうち，「集団志向」（自分の考えを主張するより，他の人との和を尊重したいという傾向）との間にのみ，負の相関が示されたことを明らかにしている。本研究からは，中学生でも伊田（2008）と同様の関連性があると指摘でき，仮想的有能感をもつ者は，あらゆる発達段階において集団生活を行いにくい状況にある可能性が示唆された。

４－３．有能感タイプによる居心地の良さの感覚の違い

さらに，有能感の各タイプによって，居心地の良さの感覚に違いがあるかを検討したところ，居心地の良さの感覚は，「自尊型」が最も高く，次に「全能型」で，最も低いのは「仮想型」と「萎縮型」であった。このことは，学校での居心地の良さの向上に対して，他者を軽視するかどうかということよりも，まず自己を肯定的に捉えられているかどうかということが基本的に関与するということを示している。この点に関しては，居場所の心理的機能に「自己肯定感」が含まれる（杉本・庄司, 2006）ことが関連しているだろう。杉本・庄司（2006）は，居場所の「自己肯定感」機能は，とりわけ「友人など，家族以外の人がいる居場所」において高く発揮されるものであると指摘している。友人関係のなかで自我を確立する中学生（岡本, 1992）にとって，多様な他者がいる学校で自己の肯定的側面に着目できることは，その学校という場に対して肯定的な感情を抱きやすいと推察される。

しかし，「自尊型」と「全能型」の間に差がみられたことから，仮想的有能感は，自尊感情が高い者にとって居心地の良さの感覚を左右する要因となる可能性が考えられる。自尊感情も仮想的有能感も共に高い「全能型」は，自分に対する優越感を感じ，他者に対して不満を抱いている（速水, 2006）。このように，たとえ自尊感情が高くとも，そこに仮想的有能感が併存することによって，他者との関係は良好ではなくなる可能性が生じる。居心地の良さの感覚は，学校生活のなかでも友人関係の状態によって規定される（大久保, 2005）ことを考えると，こうした対人関係の課題を抱えることは学校での居心地を悪くするだろう。そのため，自尊感情が高い者のなかでも，仮想的有能感の高低によって居心地の良さは異なると考えられる。

４－４．有能感タイプと各スキルの高低との組み合わせによる居心地の良さの感覚の違い

加えて，有能感タイプと各スキルの高低との組み合わせによって，居心地の良さの感覚に差があるかを検討した結果，以下の学校生活スキルについては，いくつかの特徴が認められた。

まず，自己学習スキルの高低との組み合わせ，および集団活動スキルの高低との組み合わせについては，萎縮型において，各スキルが高い者の方が「居心地の良さの感覚」が高いという違いが認められた。萎縮型は，自分への自信の低さから劣等感が高く，無気力感を抱いている場合が多いとされる（速水, 2006）が，中学生の劣等感を引き起こす要因として「学業成績の悪さ」が指摘されている（髙坂, 2008）。また，自己学習スキルは，学習に対して肯定的に捉え，意欲的に取り組むことができるスキルである（飯田・石隈, 2002）。したがって，たとえ萎縮型の者であっても，自己学習スキルを獲得することによって学習への意欲が高まり，劣等感が軽減することにつながるため，学校での居心地が良くなるのだと推測される。

また，自尊感情が高いことは，自他共に信頼し合える関係を築きやすい（鈴木, 2010）が，萎縮型は自尊感情が低いために，信頼し合える対人関係を築くことが難しいと考えられる。ところが，集団活動スキルは，対人関係を円滑に保つためのスキルである（飯田・石隈, 2002）ため，その獲得によって，友好な対人関係を構築しやすくなるだろう。そのため，同じ萎縮型であっても，集団活動スキルの違いによって対人状況が異なり，友人のいる居場所が大きな意味をもつ中学生（杉本・庄司, 2006）にとって，学校での居心地の良さに自ずと差が生じたのだと推測される。

さらに，健康維持スキルの高低との組み合わせについては，「仮想型で健康維持スキルが低い群」のみが「居心地の良さの感覚」が低いという結果であった。仮想的有能感が高い者は，他者に近づきたいという思いがある一方，他者に対して嫌悪・不信・脅威といった感情を抱きやすいために，他者を信頼できず，他者と親しくなることを回避してしまう傾向がある（高木・丹羽・速水, 2008）。また，友人に援助を求めない傾向もあると指摘されている（小平・青木・松岡・速水, 2008）。これらのことから，仮想的有能感が高い者は，不安を抱いていても他者に相談することができず，一人で抱え込んでしまう傾向があると推測される。一方で，健康維持スキルは，心身の不調を他者に相談することなどによって，解決を促進すること

ができる力である（飯田・石隈, 2002）。これらを考え合わせると，「仮想型で健康維持スキルが低い群」は，そもそも他者に援助を求めない傾向をもち，かつ誰かに相談するスキルも獲得していないため，最も適応状況が悪かったのだと考えられる。

一方，同輩とのコミュニケーションスキルの高低との組み合わせについては，自尊感情が高い群において，同輩とのコミュニケーションスキルが高い者の方が「居心地の良さの感覚」が高いという違いが認められた。自尊型の居心地の良さの感覚が最も高いことや，自尊感情が居心地の良さの感覚に強く関連していることは，本研究で既に指摘したところである。そうした特徴を有する者が，さらに「同輩とのコミュニケーションスキル」を併せもつことによって，いっそう居心地の良さが向上することは興味深い。このことは，自尊感情の高まりによって自己を肯定的に捉えられている者が，仲間とのコミュニケーションを円滑にすることによって，最も学校での居心地の良さを増大させることができるということを意味している。したがって，構成的エンカウンターグループといった自尊感情を高める支援（國分, 1981）を行った上で，コミュニケーションスキルのトレーニング（江村・岡安, 2003）を行うことが，最も学校での居心地の良さの感覚を向上させる有効な方法であると考えられる。

４－５．まとめと今後の課題

本研究においては，中学生における仮想的有能感を含めた自信の状況と居場所感との関連，および，それらの関連性に対して学校生活スキルがどのように関与するのかという点を検討した。その結果，仮想型では，健康維持スキルが低い者が最も居心地を悪く捉えていることが示された。また，萎縮型では，自己学習スキルを高めることによって，居心地の良さの感覚を向上させる可能性があることが明らかとなった。さらに，自尊感情が高い者では，同輩とのコミュニケーションスキルを高めることによって，いっそう居心地の良さの感覚を向上させる可能性が示された。

しかし，本研究では性差を含めた検討をしていないことや，学校生活スキル以外の影響因を検討していないことなど，いくつかの課題が残されている。今後は，これらを踏まえた詳細な検討が必要である。

謝辞

本研究は，第一・第二筆者が実施し，第三筆者が指導した平成26年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を，加筆・修正したものです。実施にあたり，調査に快くご協力いただきました生徒の皆様，ならびに先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

安藤史高　2006　自律性欲求と仮想的有能感との関連について　一宮女子短期大学紀要, **45**, 121－128.

江村里奈・岡安孝弘　2003　中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究　教育心理学研究, **51**, 339－350.

速水敏彦　2006　他人を見下す若者たち　講談社

速水敏彦・木野和代・高木邦子　2004　仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **51**, １－８.

速水敏彦・木野和代・高木邦子　2005　他者軽視に基づく仮想的有能感　―自尊感情との比較から―　感情心理学研究, **12**, 43－55.

Hayamizu T, Kino K & Takagi K　2007　Effects of age and competence type on the emotions: Focusing on sadness and anger. *Japanese psycological research*, **49**, 212－221.

速水敏彦・木野和代・高木邦子・蘭千尋・佐藤有耕・小泉令三・桜井茂男　2003　「仮想的有能感」をめぐって　日本教育心理学会総会発表論文集, **45**, 546－547.

Hayamizu T, Kino K, Takagi K& Tan Eng-Hai　2004　Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127－135.

速水敏彦・小平英志　2006　仮想的有能感と学習感および動機づけとの関連　パーソナリティ研究, **14**, 171－180.

本間友巳　2000　中学生の登校をめぐる意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究, **48**, 32－41.

伊田勝憲　2008　仮想的有能感と生活価値観の関連　―他者との関係性に注目して―　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **17**, 72－73.

五十嵐哲也　2010　中学生における不登校傾向と学校生活スキルの多様性との関連　教育心理学研究発表論文集, **59**, 478.

五十嵐哲也　2011　中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連　教育心理学研究, **59**, 64－76.

飯田順子・石隈利紀　2002　中学生の学校生活スキルに関する研究　―学校生活スキル尺度（中学生版）の開発―　教育心理学研究, **50**, 225－236.

飯田順子・石隈利紀・山口豊一　2004　学校生活スキルに関する研究②　―学校生活スキル尺度（中学生版）の再検討―　日本教育心理学会総会発表論文集, **46**, 539.

石田靖彦・友廣真由　2014　学級内の友人関係が学習に対する意欲と行動に及ぼす影響　―「友人の特徴」の効果と「関係の特徴」の効果―　日本社会心理学会第55回発表論文集, **55**, 258.

石本雄真　2010　青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響　発達心理学研究, **21**, 278－286.
小平英治・青木直子・松岡弥玲・速水敏彦　2008　高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション　心理学研究, **79**, 257－262.
小平英志・小塩真司・速水敏彦　2007　仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験　―抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して　パーソナリティ研究, **15**, 217－227.
國分康孝　1981　エンカウンター　―心とこころのふれあい―　誠信書房
髙坂康雅　2008　自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的変化　教育心理学研究, **56**, 218－229.
松井美穂・笠井孝久　2012　不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの　―不登校経験の意味づけと影響―　千葉大学教育学部研究紀要, **60**, 55－62.
文部科学省　1992　学校不適応対策調査研究協力者会議報告（概要）　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm
大久保智生　2005　青年の学校への適応感とその規定要因　―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討―　教育心理学研究, **53**, 307－319.
大久保智生・加藤弘通　2005　青年期における個人―環境の適合の良さ仮説の検証―学校環境における心理的欲求と適応感との関連―　教育心理学研究, **53**, 368－380.
岡本夏木　1992　青年期の展開　岩田純一・吉田直子・山上雅子(著)　発達心理学　有斐閣　pp.185－207.
杉本希映　2010　中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討　湘北紀要, **31**, 49－62.
杉本希映・庄司一子　2006　中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究　学校心理学研究, **6**, 31－39.
鈴木真吾　2005　自尊心と被受容感からみた思春期の適応理解 ―ストレス反応・本来感との関連― 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **14**, 107－108.
鈴木真吾・小川俊樹　2007　自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討　―社会的スキルとの関連から―　筑波大学心理学研究, **34**, 91－99.
鈴木有美　2010　他人を見下す若者たちの性格的特徴―仮想的有能感と５因子性格検査の関連―　瀬木学園紀要, **6**, 66－71.
忠井俊明・本間友巳　2006　不登校・ひきこもりと居場所　ミネルヴァ書房
高木邦子・丹羽智美・速水敏彦　2008　仮想的有能感と対人関係（１）　―他者軽視傾向と対人感情の変容―　心理学研究, **72**, 36.
White.R.W　1963　*Ego and reality in psychoanalytic theory : A proposal regarding independent ego energies.:* New York, Internatinal Universities Press.（中園正身（訳）　1985　自我のエネルギー―精神分析とコンピテンス―　新曜社）